中　国　訪　問　記

古　澤　俊　彦

往々にしてあることだが，人は初めて訪れた地に懐旧の念をいだくことがある。

雑然とした中にも温みのある街並。道行く人の人なつっこい双眸。そこここにみられる優しい曲線を持つ柳樹。どの光景にも，思い出じみた懐かしさを覚えてしまう。

“既視感”と呼ばれるこの現象については様々な説明が行われている。しかし，どのような説明よりも大切なのは，身内に湧き起こる感動そのものに違いない。

私が，今度の訪中で得た気持ちを要約すれば，“初めて訪れた懐かしの大地に対する感慨”とでもくくれるかもしれない。

時をおって，今回の訪中をふりかえり，その状況の中で浮かんだ雑感めいたものを記そう。

私達の第一の訪問地は，中国の首都“北京”である。北京の空港に着くと間もなく，「日本の皆さん，私達は皆さんの到着を首を長くして待っていました……。」という中国の友人の流暢な日本語が私達を出迎えてくれた。空港の雰囲気は成田のそれと違って，不気味なくらい閑散としていた。しかし，その静謐も，私達が空港の建物に入ると，ものの見事にやぶられた。館内には，そのあまりの大きさに，音が割れたように聞こえる“日中友好音頭”が響きわたっていた。そして，人民解放軍の兵士達は決して体にあっているとはいえない少々不恰好な軍服の袖のあたりを気にしながら，ぎこちない笑みを向けた。さらに飛行場を出ると，中国独特のドラの音。“歓迎(ホワイン)，歓迎(ホワイン)，熱烈歓迎(レーリエホワイン)！”というリズムにのった歓呼の嵐が私達をおしつつんだのだった。

感動的な到着のシーンが頭の中に明滅しているバスの車上で，私達はびっしりと組まれた日程の再確認をしていた。いよいよ，中国の旅が始まったのだった。

北京滞在中のハイライトは，今回の訪中の主たる目的でもある，“国慶節”式典への参加であった。滞在三日目の十月一日，うす日のさす天安門広場には，50万人の市民がつどい，50万人のパレードが，私達の眼前に繰り広げられた。人の多さにあきれてしまった。そして，この多くの人々が，等しく人間として生まれて来たことの喜びを享受していけるように，いかにして持っていくか，いや，はたしてそのようなことが可能なのだろうか？　人海の中の一雫のような私の胸には，そんな思念が去来するばかりだった。

又，その日の北京の夜の交歓会は，言葉では形容しがたいくらい素晴らしいものだった。地上では，若さのエネルギーが爆発し，夜空に烟花が華やかに咲き乱れた。

北京での観光名所めぐりもそれなりに面白味はあったが，そのあたりのことは他日に紹介させてもらうことにして，私達が，二番目に訪ねた，中国の大工業都市の“武漢”での出来事について語ろう。

武漢では，長江の遊覧が最も印象深かった。その大河の雄大なながめもさることながら，いくつかの出会いが武漢を忘れられない地にしてくれた。湖北省の人民広播電台の許衛国氏らが，私の属していた中央青年団体連絡協議会の訪中団団長，亀岡氏にインタビューに来たことがすべての始まりだった。その時，私以外の中国語のできるメンバーは，おりあしく，ダンスに興じていた。私はいきなり，急場しのぎの通訳をおおせつかってしまった。私の拙い語学で対応できるだろうか？　冷汗が背すじをつたった。インタビューをどうにかすませると，中国で親しくなった人々が，武漢市中央青年連合会の常任委員で，中国の漫才といわれる“相声”のスター向祚歓氏にひきあわせてくれた。つづいて，中国でもよく知られている”網小調(ソーラン節)”の第一人者，呉雁澤氏と知遇を得た。夢のような話だが，二人で，ソーラン節を歌い，再会を約したのだった。しかもこの模様はラジオで流れ，翌日の“長江日報”の一面をかざった。

武漢大学での出会いも忘れがたい。大学院で経済学を少しかじった私だが，武漢大学と母校同志社大学の友好関係を，今回の訪問で初めて知った。アメリカ，カナダ経済研究所の趙徳副所長との交流はこれからも長くなりそうだ。

最後の訪問地，上海は中国一の大都会。前二都市とは少し趣を異にする落ち着いた歓迎ぶりはさすがである。上海展覧館の夜会で知りあった美貌の才媛，中華全国学生連合会副首席・丁綺嬢との交歓，上海滞在二日目に上海青年を代表して懇談した，上海青年連合会副首席・王生洪氏との出会い，すべて望外のよろこびであった。

人民公社の実情をみて，生産責任制の導入等，経済的インセンティブを与えることによって経済の活性化を図ろうという政策を眼のあたりにできたことも上海での収穫であった。

これまで語ってきたように，この交流は私に様々な人々と知りあう機会を与え，私の見聞をひろめてくれた。しかし，今回の交流は，21世紀に向かう日中両国の“若人の夢と志の連帯”のスタートにしかすぎない。

三千人という大世帯による，そしてできるだけ多方面から，各界の人物を網羅しようという性格からも，今回の交流が，時間的な制約も手伝って，ややもすると，表面的な浅い交流にとどまってしまわないかという危惧の残ることは否定できない。今後の私達の課題

は，この21世紀につらなる壮大な交流の意義を，歴史の中に確定していくことにある。

その認識にたつ時，生産管理，交通体系の整備，民衆の意識を高め，その力をうまく経済建設に生かしていく制度上の工夫等について，より深い，専門的な，技術的交流が押しすすめなければならないのは蓋し当然である。

私は，日中間に，平和と友誼の万里の長城を築こうと，中国の『青年報』を通じて訴えてきた。しかし，その長城は外敵から自国の領土を守るという閉鎖的なものではなく，この惑星に生まれあわせた，私達人類とすべての生物を開放的につつみこむ，目にはみえないが最も強固な，世界新精神文明の頂点をめざすものでなければならないのである。

（古沢俊彦＝元当センター総務課主事）

1984年センター在職中の訪中に際し書いたものです。